第８回学会発表への論評

御園敬介氏「ジャンセニスムと信の観念史」について

森村　敏己（一橋大学大学院社会学研究科教授）

ジャンセニスム問題は 17～18 世紀のフランス宗教史、思想史、政治史さらには社会史において重要な位置を占めている。もちろん、これだけ多様な角度から注目を浴び、分析対象となってきたという事実は、ジャンセニスム問題が時間の推移とともにその相貌を次々と変化させてきたことを示しており、そのため「ジャンセニスム」という同一の言葉を用いながらも研究者の関心は様々な方向に向かっており、問題へのアプローチも一様ではない。当然、「ジャンセニスム」という言葉が担う意味、少なくとも

この用語によって指し示そうとする主要な論点は研究者によってそれぞれ異っている。したがって「ジャンセニスム」とは何かを定義することは極めて困難だといわざるを得ない。しかし、御園氏によればジャンセニスムの場合には特別な事情がこの困難をより大きなものにしているという。つまり、「ジャンセニスム」という言葉は批判者によって一方的に押しつけられたものに過ぎず、この言葉を浴びせられた人々がそれを受け入れることは決してなかったのである。つまり、「ジャンセニスム」とは「引き受け手を欠いた概念」であったというのだ。

しかし、この「ジャンセニスム」をめぐって激しい論争が生じ、実際に弾圧が行われたことは事実であり、引き受け手がいようといまいと、また、ジャンセニスムを定義することが不可能であるか否かに関わらず、何らかの重要なテーマがそこで問われていたことに疑問の余地はない。このため、御園氏はジャンセニスムとは何であったかという問題提起の仕方を避け、何が問われていたのかを明確に浮かび上がらせることで、この厄介な「ジャンセニスム」問題に迫ろうとする。

そのために御園氏が注目するのが「信仰宣誓書」と呼ばれる、ジャンセニウス断罪を誓約する文書への署名強制政策である。ジャンセニウスの著作『アウグスティヌス』から導かれたとされる五つの命題について、教皇イノケンティウス 10 世はこれらを異端であるとしながらも、五命題がジャンセニウスのものかどうかについては明言を避けた。このことに端を発した一連の論争の結果、反ジャンセニスム陣営は五命題をジャンセニウスのものだと認めさせるために信仰宣誓書への署名強制を計画するのだが、この動きはジャンセニスムの教義と離れて、別の問題を惹起することになる。つまり、「信じる」ことの基盤とは何かという問いである。神の啓示に基づく事柄、すなわち「神的信」の対象については教皇は不可謬であり、信者に自らの決定を受け入れるよう求めることは当然である。しかし、個別的な事実関係に関する認識については教皇も誤謬を免れないのであり、この領域に関しては「人間的信」、言い換えれば各人の内面的・自発的同意に委ねるしかない。だが、「信」の種類と基盤に関するこの二分法に従っていては、五命題がジャンセニウスのものであるかどうかは単なる事実関係に関わる事柄、「人間的信」の領域に属する問題と見なされる可能性が高い。とはいえ、それを避けるために、事実関係についても教皇は不可謬であるとまで主張することはためらわれた。もちろんジャンセニスムと戦うためにあえて教皇至上主義ともいえるこうした立場を取る人々もいたが、従来の教会の立場との整合性という点で、さらにはフランスにおけるガリカニスムとの対立という意味で、この方向を推し進めることには問題が多かったのである。このため、信仰宣誓書への署名を強制するには、「神的信」の対象ではないが、「人間的信」に委ねられるわけでもない領域を確保し、そこにおいて教皇の決定への従属を信徒の義務とする必要がある。そこで弾圧側は「教会的信」という第三のカテゴリーを創出することになったのだという。

御園氏はここで反ジャンセニスト陣営の一人マランデの著作を検討することで、この「教会的信」成立の事情を解きほぐし、さらにはマランデの思想をいわば「信の観念史」の中に位置づけようとする。それによってジャンセニスム論争において問われていた、少なくとも大きなテーマの一つが「信じる」という行為の基盤を問うという、極めて長い射程をもつ問題であったことを明らかにされるのである。

「信」の分類と根拠を問うこと。それはもはや神学の領域には収まらない広がりを持っている。教会の権威、教皇の決定はどこまでカトリック信者の「信」を規定するのかという問いは、権威と個人的良心の対立・相克というより大きなテーマに直結するだろう。また、教会的信という概念を受けてボシュエが主張したように、教会的信の基盤が教皇の不可謬性ではなく、教皇への尊敬と敬意に由来する信徒

の服従義務であるとしたら、そこからは「信じる」という行為が持つ道徳的意味という問題が派生することになろう。さらに、啓示に基づく「神的信」と個人の内面的・自発的同意に立脚する「人間的信」との関係をどのように理解するかは、信仰と理性との関係をあらためて問い直すことにつながるはずだ。

このように、御園氏はジャンセニスム論争のおける信仰宣誓書への署名強制というひとつの事件を詳細に分析することで、ジャンセニスム問題が何であったかではなく、それがなぜ重要なのかを解明してみせたと言えるだろう。もちろん、このテーマがジャンセニスム問題のすべてだということではない。論争が時の流れとともにその論点を変えていったことはすでに述べたとおりであり、18 世紀に入るとジャンセニスム問題とは何より政治問題へと変質していく。しかし、御園氏が浮かび上がらせた問題群が、近代思想史の中で重要な位置を占めるものであることは明らかだろう。御園氏の立論に沿ったかたちで表現するとすれば、デカルトは「コギト」によって近代的な「信」の基盤を確立したと言えるのかもしれない。しかし、その「信」はあくまで「人間的信」であった。彼の死後まもなく、ジャンセニスム論争の中でこの「人間的信」はそれが及ぶ領域をあらためて問われることになった。「神的信」とは別の地平を確保することで近代哲学の基礎となるかに見えた「人間的信」は「教会的信」の挑戦を受け、あらためて自らの領域と根拠とを鍛え直すよう迫られたと考えるのは御園氏の意図を歪めることになるだろうか。いずれにせよ、デカルトの同時代人たちによって行われたこの論争のもつ魅力を、御園氏が鮮やかに示したことは確かである。